

- ScholarOne Manuscripts User Conference 2014 in アメリカ
- 国際科学編集者会議 (CSE) 参加レポート
- 査読依頼への返答に対するリマインダーメールの設定



## 世界中のユーザーと 情報を共有

ScholarOne Manuscripts User Conference 2014 in アメリカ

Thomson Reuters社主催のScholarOne Manuscripts™ (以下S1M) User Conference 2014が4月10日～11日にアメリカのフロリダ州フォートローダーデールで開催されました。このカンファレンスは世界中からS1Mユーザーが集まり、S1Mと学術出版に関わる様々な情報を共有する場として毎年開催されています。今年はアメリカ、イギリスの学協会と出版社を中心に合計約150名、弊社からは3名が参加しました。

本カンファレンスでは、Thomson Reuters社および上級ユーザーによるプレゼンテーションを中心に約20のセッションが行われました。大きなトピックとしてはS1Mのユーザビリティ向上のための取り組みについて、バージョンアップ情報、S1Mと関連したサービスの紹介、そしてユーザープレゼンテーションがあげられます。また、これまでのカンファレンスとは異なり「より著者が投稿しやすくするために」や「著者の満足度の向上のために」といった著者に焦点を当てた発表が多くみられ、会場の関心を集めていました。この背景には、論文投稿を促す環境を作ることが投稿数を上げ、質の高い論文を集めることが最終的にはジャーナルの価値向上につながる、という考え



方があります。全体を通して活発な質疑応答が行われ、時折大きな笑いが起こるなど会場には終始和やかな雰囲気漂っていました。

**本家のユーザープレゼンテーション: SNAPSHOTS**

弊社主催のユーザーカンファレンスでも大変ご好評いただいているユーザープレゼンテーションですが、本家のカンファレンスでも大いに盛り上がりました。アメリカでは「SNAPSHOTS」という名前で呼ばれ、発表時間はそれぞれ3〜5分程度と少々短めでしたが、どれも興味深い内容で、既定時刻を過ぎても質疑応答が続く場面も多くみられました。目を引いたテーマとしては「自由記入のキーワードの表記を

統一させる方法」[Editor Kickによる審査期間の短縮] などがありました。詳細に関してはまた別の機会にご紹介いたします。

### S1Mと連携する 新システム&サービス

『Connecting: People, Institutions, and Manuscripts』というセッションでは、アップデート情報の一部をクロスアップし、S1Mと連動して働く新しいシステムやサービスとして、Thomson Reuters社が提供するReviewer Locator、外部機関が提供するORCID、Ringgoldが紹介されました。

### Reviewer Locator

査読者選出のアシストシステム。論文のキーワードや分野、要旨をもとに、Web of Science上から査読者に相応しい候補が30名リストアップされるので、編集委員の個人的なコネクションへの依存や手動で検索を行う必要がなくなる。さらに、特定の研究者への査読依頼の集中も防げる。過去5年間に出版された、Web of Scienceに登録されている論文の著者、約730万人が検索の対象。

### ORCID

2012年10月にサービスを開始した研究者識別子のデータベース。いわゆる名寄せ問題を解決するために作られた。現在S1Mではアカウント情報の一つとして登録できるのだが、将来的にはより連携を深めていくとのこと。

### Ringgold

2006年にOxford University Pressのプロジェクトとして設立した研究機関のデータベース。研究機関は所在地や規模、所属メンバーなどを登録することで、研究機関識別子であるRinggold IDが与えられる。2014年後半のアップデートでアカウント情報とRinggold IDの結びつけが可能となる予定。

### 言語切り替え機能、 タブレットやスマートフォンへの 対応も

『Product Update and Future Direction』というセッションでは、今年度の実施予定のアップデートの概要が公開されました。2014年のアップデートでは段階的にサイトのデザインを大きく見直し、特にアカウント作成や投稿の画面をよりシンプルに使用しやすく変更する予定です。また、言語(日、仏、中、英)切り替え機能とタブレットやスマートフォンへの正式対応が発表されました。これらはサイトにアクセスする機会を拡大し、利用者のユーザビリティを大きく向上させます。このセッションでも前述のReviewer Locator、ORCID、Ringgoldなどの連携について強調していました。

### ユーザーの声に 進化を続けるS1M

『Advancing the User Experience』というセミナーでは、S1Mのアップデート内容を決定するための手法につ

### ScholarOne Full Configuration Training Seminar



に参加しました!

User Conferenceに先立って7日～9日の3日にわたり、ScholarOne Full Configuration Training Seminarが開催されました。これはサイトの構築や設定変更に関するセミナーで、弊社からはS1Mのサポートを担当している真鍋と山田が参加しました。

イギリスから3名(BMJ, Cambridge University Press, SAGE Publications)、ブラジルから1名(SciELO)と合計6名が参加し、サイト設定変更時の注

いて紹介されました。S1Mでは年に4回のバージョンアップを行っていますが、アップデートを行う最大の目的はユーザビリティの向上です。そのためには現状の問題点をしっかりと把握するために大勢のユーザーの声を集め、それらを深く掘り下げる必要があります。その手段としてScholarOne IDEAS(全ユーザーから意見を募集)、β版でのテスト(ベータランユーザーによる試験的運用。弊社も参加)、ユーザビリティテスト(投稿者、査読者などのユーザーによる使いやすさのテスト)を実施しているとのことでした。こうして広く集められた情報をもとにS1Mは進化を続けています。

海外での運用事例やアップデート情報はもちろんのこと、ORCIDやRinggoldのようなオンラインで学術情報を扱う上で役立つサービスやS1Mを改善する手法など、本カンファレンスでは弊社としても大変参考になる情報を得ることができました。今後も国内外を問わず意欲的に情報収集を行い、皆様と共有していきたいと考えています。

意点や設問の作り方を学びました。講義が有意義だっただけでなく、参加者同士の交流から海外での運用事例等を直接聞くなど様々な情報が得られ、充実したセミナーとなりました。この成果は日々のサポートやワークショップ、国内のユーザーカンファレンスなどに活かしていきますので、ご期待ください!





# 不正が発覚したら、どう対応しますか？

毎年恒例の国際科学編集者会議 (CSE: Council of Science Editors) のアニュアル・ミーティングが、5月2日～5日の4日間、アメリカのテキサス州サンアントニオで開催され、弊社から2名のスタッフが参加しました。

セミナーを通して様々な情報が発表されましたが、なかでも出版倫理委員会 (COPE: Committee on Publication Ethics) との共同セミナー「不正の疑惑に関する調査—協力と機密性のバランス (Misconduct Investigations – Balancing Collaboration and Confidentiality)」が特に注目を浴びていました。掲載済みの論文に不正が疑われた場合、どの様に対応すべきか、どの様なタイミングで著者やその所属機関に連絡をとるべきかについて、実例を用いて、編集委員長、研究機関、弁護士がそれぞれの立場から意見を述べるケース・ディスカッションが行われました。

問題が生じた場合、または不正が疑われた場合の対処法について、三者ともに「COPE が発表しているフロー (右図参照) を参考に進めるべきである」との意見を述べていました。また、調査には著者の所属研究機関の協力が不可欠であるため、ジャーナルの運営側は研究機関の協力を得るための努力も必要であるというのも三者共通の意見でした。不正の発覚はジャーナルと著者だけでなく、著者の所属研究機関の信用にも大きな影響を及ぼすので、解明していくための協力体制が重要になるとの見解です。

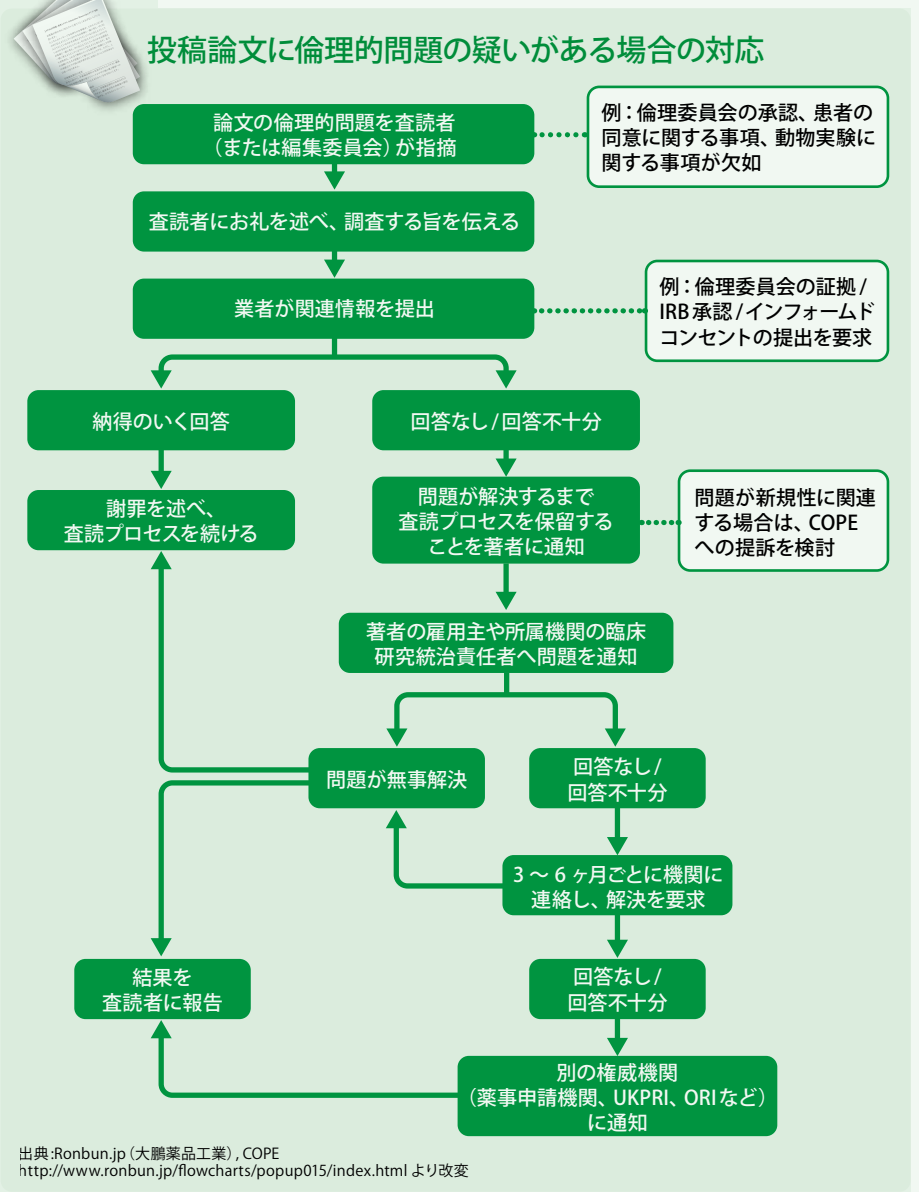
これに関連して、「不正を指摘する際の障壁とリスク管理」に関するセミナーがいくつか開催

されました。そこで発表されたリスクと障壁は以下の通りです。

- ① 不正があったという前提で、確証を得ないまま調査を進めてしまうリスク
- ② 著者の経歴に大きな傷を付けてしまうリスク
- ③ ジャーナルの信用に著しい傷を付けてしまうリスク
- ④ 疑惑について著者に問い合わせた際に、一切回答がない
- ⑤ 著者の所属機関が不正の事実を認めない
- ⑥ 著者や研究機関によるジャーナルに対する訴訟リスク
- ⑦ 著者や研究機関による不正を告発した査読者に対する訴訟リスク

特に訴訟リスクについては、不正が明らかではない場合、その真相は著者本人しか分からないことが多いため、調査には慎重なステップを必要とすること、そして著者が所属する研究機関が信頼低下を恐れ、その防御策として訴訟を起こす可能性が高いとのアドバイスが弁護士からありました。また、それらのリスクに国境はなく、国を越えて訴訟に至る可能性があるとも指摘されました。

今回の CSE ミーティングではその他にも Open Access の現状や Open Peer Review に関する報告、そして現在、学術出版業界で世界的に問題になっている Predatory Publishing に関する報告などがありました。これらの情報は杏林舎ホームページ内の「あんずジャーナル」等で公開していく予定です。



「S1Mワークショップ」を2ヶ月に1度開催しています。S1Mをもっと便利に、もっと簡単にお使いいただけるよう、少人数制のワークショップを本年1月より、2ヶ月に1回のペースで開催しています。第1回「ビギナー向け」、第2回「Cognos Reports」、第3回「E-mail テンプレート」のテーマで開催いたしました。各回とも多数の学協会様にご参加いただいています。

普段は、お電話やEメールにてお問い合わせにお答えしていますが、少人数で、直接お会いして画面をご覧いただきながら操作方法や機能をご紹介します。今まで使っていなかった機能や知らなかった操作方法などが操作体験を通じて、より明確にご理解いただけるようになります。説明の途中で疑問に感じたことは、その場で気軽に質問できるような雰囲気づくりを心がけています。テーマ以外でも、日常業務でお困りの点などについて、一緒に参加されている皆様とお話をされる機会としていただければ幸いです。

今後もし引き続き開催していきますので、お気軽にご参加ください。

なお、誠に勝手ながら7月のワークショップはS1Mユーザーカンファレンス準備のためお休みとさせていただきます。



**開催予告 第3回**

**SCHOLARONE MANUSCRIPTS ユーザーカンファレンス**

3回目となる今回は、8月下旬あるいは9月上旬に、東京での開催を予定しています。テーマは、論文の不正が騒がれる今こそ考え直したい「研究・出版倫理」です。詳細は、決定次第メールにてお知らせします。皆さま奮ってご参加ください。

**2014**

## 編集後記

今号では、ともにアメリカにて開催されました本家S1M User Conferenceと国際科学編集者会議 (CSE) への参加レポートを中心に記事にしました。昨今の日本でも注目を浴びていますが、両イベントでも、研究・出版倫理についてのトピックが多く取り上げられていました。研究・出版倫理を日本で議論する場合、どのような事例が不正にあたるか等の基礎的な話や不正を防ぐための手法が話題の中心ですが、欧米では、実はその辺は既に議論が尽くされ、次の段階といえる「不正が発覚した際の対処法」に論点が移っています。いち早く日本の皆様にもお知らせしたいと、今号ではその点についても記事にしています。次回で3回目を迎える日本のS1M ユーザーカンファレンスでも、研究・出版倫理についての講演を予定しており、CSEで取り上げられたトピックもポスターにて紹介できればと考えております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(嶋田 朝彦)

## S1M NEWS

2014年6月27日発行 第3号

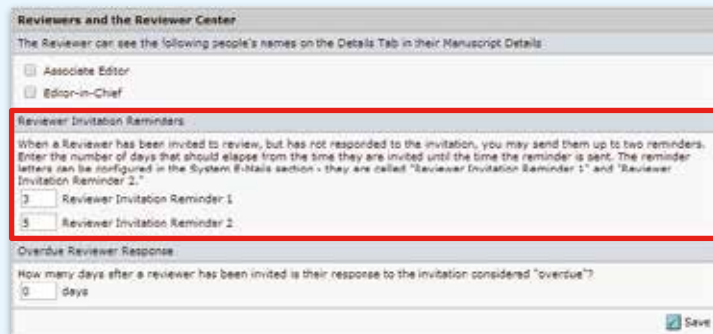
発行 株式会社 杏林舎  
 〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10  
 TEL. 03-3910-4311  
 FAX. 03-3949-0230  
 URL http://www.kyorin.co.jp

編集・制作・デザイン 株式会社 杏林舎  
 E-mail s1mnl@kyorin.co.jp

©株式会社 杏林舎 本誌掲載の記事・写真・イラストレーション等の無断転載を禁じます。

## 査読依頼への返答に対するリマインダーメールの設定

リマインダーメールに関するテンプレートのほとんどは「E-mail テンプレート」内「E-Mail Notifications and Reminders」から設定します。しかし、査読依頼への返答に対するリマインダーメールの場合、別の場所から行います。



### 【送信のタイミングの設定】

- ① 事務局 Dashboard より「サイト設定 (Configuration Settings)」を開きます。
- ② 「Reviewers and the Reviewer Center」の下「Reviewer Invitation Reminders」にある「Reviewer Invitation Reminder 1」「Reviewer Invitation Reminder 2」に査読依頼の何日後にリマインダーメールを送信するか入力し、保存します。

査読依頼への返答に対するリマインダーメールを上手に使用して、査読者アサインまでの時間を短縮しましょう！

こんにちは！ 学術ソリューショングループの山田です。S1M NEWS 第2号 にして早くもお蔵入り (!?) かとされた本コーナーですが、本号で復活することとなりました！ 今回のテーマは「査読依頼への返答に対するリマインダーメールの設定」です。テンプレートの編集と送信のタイミングを設定する場所がポイントです。

